

災害伝承 外国人視点で

研究者らが公開講座

南三陸町

外国人の視点から被災地の記録と伝承について考える公開講座が24日、南三陸ホテル観洋で開かれた。海外の災害経験を基にした外国人研究者らの講話を通じ、災害を伝える意義や役割について理解を深めた。

大学都市安全研究センターのオープンゼミナールとして開催。気仙沼市、南三陸町で語り部活動を行っている関係者ら約30人が参加した。

地震に関する「災害記録と共有」をテーマに講話した。復興によって建物などの物理的再建が進んだが、災害を伝えること、聞くことも重要な一部であるとの認識を強調。災害を記録、伝える意義に関して、悲しみの表現、犠牲者への敬意を払う方法、子孫に教訓を伝えるため

「などと説明し、東日本大震災の被災地を回ってその重要性を再確認したことを伝えました。気仙沼観光コンベンション協会で働く米國出身のニシヤント・ア

ンヌさんは、気仙沼を訪れる外国人の中でも「震災のことを知っていたという人は多い」とい

「震災時のストーリーを伝えていくかに言及。ただでなく、被災した人が困難を乗り越え、今どのように生きていくかを発信したい」と語った。

神戸大学地域連携推進室の山地久美子学術研究員は、高齢化が進む語り部活動に、次世代が取り組める仕組みづくりが課題だと説明。阪神淡路大震災や、熊本地震での伝承について紹介し、「オリジナルな形で伝える工夫を」とアドバイスした。



災害の伝承について考えた講座